

第1回 宇都宮市外国人児童生徒教育推進計画策定懇談会 会議録

日時 平成20年9月30日(火) 午後1時30分～午後3時00分

会場 教育委員室(本庁舎13階)

出席者

委員：佐々木史郎会長，青柳勝男副会長，石川美和委員，阿久津容子委員，
中川エスペランザ委員，佐々木英明委員，臼井佳子委員，
糸井規雄委員，倉田明男委員，山田祐子委員，吉田しのぶ委員

事務局：教育長，教育次長，教育監，副参事兼学校教育課長，教育企画課長，
教育企画課教育制度担当主幹，教育企画課総務担当主幹，
学校管理課長，学校健康課長，生涯学習課長，教育センター所長，
学校教育課課長補佐，学校教育課指導グループ係長 ほか

傍聴者 2名(報道関係者)

会議経過

- 1 開会(学校教育課課長補佐)
- 2 教育長あいさつ
- 3 委員・事務局紹介
- 4 議題

会長・副会長の選出について

互選により佐々木史郎委員を会長に，青柳勝男委員を副会長に選出
会議の公開について(説明：学校教育課指導グループ係長)

本会議は原則公開とする。なお，個人に関する情報など非公開に係る事案が生じた場合には，附属機関等の会議の公開に関する要領の4の「公開・非公開の決定」により，その都度，当懇談会にて判断をする。

「(仮称)宇都宮市外国人児童生徒教育推進計画」について(説明：事務局)

- ・ 推進計画の策定について
- ・ 外国人児童生徒等に関する現状と課題について

- 5 その他

<委員からの主な意見・質問等(要旨)>

- | |
|--|
| 4 「(仮称)宇都宮市外国人児童生徒教育推進計画」について
・ 推進計画の策定について |
|--|

青柳副会長： 拠点校が東地区に集中しているが，特別な理由があるのか。

事務局： 大規模な工業団地があり，そこに外国人が通勤している関係で児童生徒が多い。

山田委員： 今後の対策を練るために保護者へのアンケートをとったと思うが，未就学・不就学のレベルを認知する材料にするには難しいのではないか。

事務局： 回答なしや居住地不明については難しいが，ブラジル人学校等に就学する予定や日本語が堪能のため私立の学校に通わせる予定であるという回答など就学の状況などを把握している。また，このアンケート送付によって就学を促進する意味合いがある。

白井委員： 初期指導教室の具体的な場所について教えて欲しい。

事務局： 宇都宮市の教育センター内の1室を予定している。時期は、今年度後半を予定。まずは研究段階ということで、1ヶ月間程度、来年度入学予定の子どもを対象に実施する。保護者が就学児健康診断で学校に行く機会もあるので、リーフレットを作成し周知して、入学するまでに日本の学校のおおよそのルールについて理解いただく。指導者は、母語による日本語指導ができる方や、学校の教育状況をよく御存知の方に協力をいただければと考えている。

石川委員： 「ひろ子さんの楽しい日本語」の他に、どういう教材を貸し出しているのか具体的に教えて欲しい。

事務局： ひろ子さんの日本語シリーズが中心だが、その他に漢字ドリル、幼児が使うひらがなを覚えるためのカードやカルタのようなものや、イラストを見ながら言葉を覚える教材なども対応している。各学年で指導して先生の要望（子どもに応じたもの）に応じて送っている。

石川委員： 日本語貸与教材の予算はいくらぐらいか。

事務局： 1校あたりというのではなくて、市全体で年間約30万円。

4 「(仮称)宇都宮市外国人児童生徒教育推進計画」について ・外国人児童生徒等に関する現状と課題について

佐々木会長： 本市外国人児童生徒教育に関わる3つの課題について、意見をいただきたい。

石川委員： 国語教育と日本語を第二言語として教えることは、全く違うことである。日本語教室担当の教員は、専門的な日本語指導で何をしたらよいか試行錯誤している。最初に研修や勉強会が必要になってくるので、定期的に行って欲しい。

阿久津委員： 自分の団体は、清原地域の中で立ち上げ、外国人との共生を促進するための啓発について、ちらし等を通してピーアールしているが、行政も地域の方々に一緒に声をかけて欲しい。今後は、学校間の連携と民間の機関との連携が推進されるとよい。

中川委員： フィリピンの子どもへの指導を担当している。フィリピンの文化を紹介する活動があると、日本の子どもは興味・関心を持ち、外国の文化が分かるようになる。さらに、日本の子どもも同じように発表することによって、お互いに理解し合えると思う。

佐々木委員： 現場の先生方は、通常の指導に加えて外国人の子どもへの指導を行うことは大変だと思う。綿密な計画を作らなければ、現場は混乱してしまう。

青柳副会長： 子ども同士は打ち解けやすいが、親同士は難しい。親の考えが子どもに影響を与えるので、保護者会などで親の意識を高めることが必要である。

白井委員： 自分の団体は、文化庁地域日本語支援事業の委嘱を受け、中央小の余裕教室で日本語指導を始めた当時からボランティアとして外国人の子ど

もたちに指導してきたが、学校によって子どもたちへの接し方が異なる。教育委員会が学校の対応について一定の規準を示すとよい。

今回、学習言語など日本語の中期・後期の支援にも重点を置いていることはよい。親の事情で日本に来ている子どもが、将来を考えていく中で、教育全般にわたって不利益を被ってはいけない。高校入試などは日本語で行われている現状があるため、大きな一歩が踏み出せればと思う。

糸井委員：現場の先生方は忙しくて、日本人の子どもへの指導だけで精一杯である。先生方にも余裕ができるよう、外国人の子どもへの指導を行う人の配置をして欲しい。街づくり協議会や地域協議会を活用していけば、生活面や言葉の面での指導を行う人材を確保でき、課題を解消できるのではないか。

倉田委員：清原中学校は、平成9年から拠点校の指定を受けている。昨年は12人いた日本語指導が必要な外国人の子どもが、今年度は既に18人となり、指導者1名での対応は困難である。市からの支援による日本語指導講師や日本語サポーター、作新大学との連携による学生にも来てもらっており、そういう面では他から比べると指導者の人数に厚みがある。しかし、担当教員がやっとその子に合ったシステムを組めたと思うと、他地区から転校してくる外国人の子どもがいるため、システムを組み直すことが多い。

生徒一人一人に応じた指導に関わる課題としては次のことがある。1つ目は地域の協力を得るなどの指導者確保の問題、2つ目としては指導教員の資質向上のための意見交換会等の充実、3つ目は初期指導教室で日本の生活や文化を保護者にも教えること、4つ目は子どもの学力を補充するために地域の方がボランティアで教えるなど。

山田委員：多文化共生が地域の活性化につながることを、自分も夢として思い描いている。外国人がいることは、日本人にとっても、自分のアイデンティティーを確立していく大きなチャンスになる。日本人生徒と外国人生徒が何かを一緒につくり上げていく体験というのは、特に若い世代にとってアイデンティティーの確立や、将来への展望という点で有効である。

自分の経験では、帰国生や留学生と日本人の混じったクラスの方が活気があり、英語の授業に前向きだった。

学校を超えたつながりについても、同じ国の仲間や別の国の仲間同士が集まる機会があればよい。宇都宮は公共交通機関が不便なため、外国人の子どもたちが集まれる機会を市が支援するとよい。

吉田委員：日本語教師を20年やっており、いろいろな場面でボランティアとして日本語を教えてきた。夏休みに毎日、1日2時間教えるなど、集中して指導すると本当に効果があった。来た時は普通の会話が全く分からなかったが、学校に行き始めてから日常会話に不自由しない程度になった例もあり、初期の集中指導は絶対に必要である。週に1回程度では少なすぎるため、毎日でも来て欲しいという要望もある。

発達段階に応じた日本語指導ということでは、小学校と中学校とでは

教え方がまったく違う。日本語を教えることと、国語の先生が日本人に国語を教えることでは全く異なる。小学生は音ですぐ覚えてくれるので、そういう指導法もあるが、中学生になると論理的に考えるため、小中学生で指導法が違ってくる。さらに、中学校は進学ということがあるため、学科の指導も必要である。

今まで指導方法の学習会は大体が講習会形式だったと思うが、経験から言うと、教えるということは技術なので、もっとトレーニングという方法を研修に取り入れて欲しい。

保護者への支援については、指導員の先生による通訳や仲立ち、日本語ボランティアがいる等の情報提供が必要である。

佐々木会長： 国際学部で平成7年から教員の内地留学生を受け入れている。毎年、県教委の派遣で5・6名の先生方が主としてポルトガル語の研修に来た際にいろいろと話を聞く。その中で、特に印象に残っているのは、研修をして外国人の子どもの教育に携わった人が、何年かで他校へ異動になってしまうらしいこと。よい人材がどんどんプールされてその活動が広がっていく体制が欲しい。

進学は我々が考えている以上に大きな問題がある。外国人の子どもは、日本人の常識と勝負できないようなところからスタートしなければならないということについて、先がまだ見えない問題のような気がする。

また、子どもの要請に、どこまで、どう関われるかということが分からないままで、ボランティアの仕事がどんどん増えていくという課題もあり、日本への定着、就学の維持は難しい。

白井委員： 日本語の教え方のトレーニングといった実践的な研修に時間とエネルギーを向けて欲しい。国語でも英語でもない日本語を、第2外国語として子どもたちや大人に教えるために、それなりの勉強を続けていくことが大切である。そういうところを分かっている先生もいるが、まだ数が少なく残念に思う。

子ども達は大切な時期を宇都宮で過ごすため、親がもっている母国文化よりも、日本の文化に馴染んでしまうことがあるが、それは避けたいことである。母国の文化を保持し日本の文化と両方を感じながら成長して欲しい。日本の子どもにとっても、お互いの文化の交流や考え方・意見の交流ができる。そういう意味でも、外国人の子どもたちに誇りと自信を持ってもらいたい。どちらの子どもにとってもよいことのため、教育の場でなんらかの形で具体化できないかと思う。

佐々木会長： 内地留学の先生方から、外国人児童生徒支援は同化教育と同義ではないと伺った。

次回、さらに計画に関わる協議を深めていきたい。

5 その他

次回日程 平成20年11月下旬の開催予定